

農作物技術情報 第4号 野菜

発行日 令和6年6月27日

発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部

編集 岩手県農林水産部農業普及技術課 農業革新支援担当(電話 0197-68-4435)

携帯電話用 QR コード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコン、携帯電話から「<https://www.pref.iwate.jp/agri/i-agri/>」

- ◆ 全 般 降雨への事前対策として排水対策を徹底しましょう。
- ◆ 果菜類【施設】 梅雨時期の草勢維持対策と病虫害防除を実施しましょう。
- ◆ 果菜類【露地】 生育に応じた整枝管理と病虫害防除を実施しましょう。
- ◆ 葉茎菜類 雨よけほうれんそうは、天候の変化に応じた適切な栽培管理と病虫害防除を徹底しましょう。露地葉菜類は、病虫害防除の徹底と計画的な作業により良品出荷に努めましょう。

1 生育概況

(1) 果菜類【施設】

- ・ きゅうりは、生育は概ね順調で順次収穫が行われています。病虫害では、アザミウマ類やアブラムシ類、県南部や沿岸部でべと病が発生しています。
- ・ トマトは、4月定植作型で収穫が始まっています。着果負担により草勢がやや低下しています。病虫害では、コナジラミ類が県央・県南部、タバコガ類が県南・県北部で発生し、平年より早くや多いです。
- ・ ピーマンは、生育は概ね順調で順次収穫が行われていますが、尻腐れ果の発生も見られます。病虫害では、アブラムシ類・アザミウマ類が発生しています。

(2) 果菜類【露地】

- ・ きゅうりは、露地普通作型で概ね平年並みの6月上旬までに終了し、生育は順調です。病虫害では、圃場によりアブラムシ類が発生しています。
- ・ ピーマンは、生育は内陸部は平年からやや早く、沿岸部は平年並みからやや遅れています。病虫害では、アブラムシ類・アザミウマ類が発生しています。

(3) 葉茎菜類

- ・ 雨よけほうれんそうの生育は概ね順調です。ハウレンソウケナガコナダニの発生は減少傾向ですが、アブラムシ類、アザミウマ類の発生が見られます。
- ・ 高冷地キャベツの生育は乾燥により平年よりやや遅い傾向です。コナガやタマナギンウワバ、オオタバコガの発生が見られます。
- ・ 高冷地レタスの生育は順調で、平年より早い傾向です。灰色かび病や斑点細菌病、アブラムシ類やナモグリバエの発生が見られます。
- ・ ねぎの生育は少雨の影響により一部でやや停滞傾向が見られるものの、概ね順調です。ネギアザミウマ、ネギハモグリバエ、べと病の発生が見られます。

2 技術対策

(1) 梅雨期の降雨への対応

- ・ 明渠や暗渠の末端部分の詰まりなど排水対策の再確認を行います。
- ・ 集中豪雨などで圃場に滞水した場合は、速やかに排水を促し、通路の中耕等により根に酸素を

供給するなどして草勢の回復を図ります。

- ・ 降雨によって泥はねが発生した場合は、天候回復後に殺菌剤の予防散布を行います。

(2) 施設果菜類の管理

ア 夏期高温期の昇温抑制対策

- ・ 熱気が溜まりやすいハウス上部（天窓・肩換気）での換気や、遮光・遮熱資材により昇温抑制を図ります。ただし、ハウス上部での換気は、強風により破損する恐れがあるので、注意してください。
- ・ 既設の換気口がない場合は、ハウスのツマ面のビニールを除去し開口部を設けます（図1）。
- ・ 遮光幕や塗布型遮光剤を利用する場合には、資材の種類や使用濃度により効果や持続性が異なりますので、事前に資材の特徴や使用方法を十分確認してから使用してください。
- ・ 梅雨明け後は、通路への散水や敷きわら等を行い、地温やハウス内気温の上昇を抑制します。
- ・ ハウス内の乾燥対策、高温抑制を目的にミストの活用も始まっていますので、興味のある方は農業改良普及センターにご相談ください。



図1 ツマ面の開放

イ きゅうり

- ・ 半促成・早熟栽培とも、群落内の採光性・通風性を維持するように摘葉や摘心を行います。
- ・ 病気の葉、古葉を中心に積極的に摘葉を行います。
- ・ 摘葉は、草勢維持のため、株当たり一度に2～3枚以内を原則としますが、主枝葉が25枚程度展開した後であれば、一度に5枚程度摘葉しても問題ありません。
- ・ 病虫害防除では、べと病、灰色かび病、アザミウマ類、アブラムシ類等の防除を基本とした薬剤を選定します。梅雨明け後に発生が増える褐斑病も予防的に防除を行います。
- ・ 土壌病害であるキュウリホモプシス根腐病と疑われる症状が見られる場合は、最寄りのJAまたは農業改良普及センターへお問合せください（露地作型も同様）。

ウ トマト

- ・ 例年、着果負担から草勢低下を引き起こしやすい時期です。適正な摘果管理（図2）を行うとともに、生長点付近の状態（葉の巻き具合等）を確認し、適切な養水分管理により草勢を維持します。
- ・ 梅雨時期は、一時的な晴天による萎れ、落花等が発生しますので、適切な換気、遮光資材（遮光幕、塗布型遮光剤）の活用による強日射（高温）対策を実施します。
- ・ 病虫害防除では、灰色かび病対策のため、換気を行い、防除に努めます。かいよう病や青枯病等の土壌病害は、発病株は速やかに抜き取り処分し、ハサミや手袋などをこまめに消毒しながら作業し、圃場内での二次伝染を防ぎます。



図2 摘果の例

エ ピーマン

- ・ 4本仕立ての整枝法は、「京ゆたか」では主枝第10分枝まで側枝3～4節摘心、主枝第11分枝以降は側枝2節摘心が基本です。
- ・ 「京鈴」「さらら」等の草勢が弱い品種は、下段側枝を2節程度で摘心し着果数を制限します。

- ・ かん水と追肥は少量多回数とし、草勢を低下させないよう管理します。
- ・ 曇雨天の継続や、着果負担が多く草勢が低下する場合は、ふところ枝の摘除や側枝の着果数を減らすなどして、主枝の伸長を促進します。
- ・ pF メーターを目安とした水分管理（目安：2.0 程度）を行い水分変動を少なくし、尻腐れ果の低減を図ります。
- ・ 病害虫防除では、灰色かび病、アザミウマ類等の防除を中心に行います。

（3）露地果菜類の管理

ア きゅうり

- ・ 収穫量が増加してくる時期のため、追肥とかん水、摘果で草勢維持を図ります。特に乾燥気味の圃場では、かん水や敷きわらなどで土壌水分の保持を図ります。
- ・ 1 本仕立ての場合の生育中期～盛期における基本的な整枝、摘葉管理は表 1 のとおりです。
- ・ 側枝の発生が鈍い場合は強剪定を避け、根の発生を促すように管理します。
- ・ 病害防除では、べと病や褐斑病、炭そ病等を中心に薬剤散布とし、疑わしい病斑が見られたら積極的に摘葉し、圃場外へ持ち出します。
- ・ 害虫防除では、定植時に施用した粒剤の効果が切れてくる時期ですので、アブラムシ類を対象に、早めに薬剤散布を行います。

表 1 露地きゅうり（1 本仕立て）の生育中期～盛期の整枝、摘葉方法（例）

	子づる	孫づる	整枝のポイント	摘葉のポイント	その他
上段	1 節摘心	半放任とし、混み合った部分のみ摘心する	1 親づるは、生育が順調な場合は支柱の肩の部分で止めるが、上段の子づるの発生が悪い場合、発生が緩慢な品種、親づるの芯が小さい場合は遅く止める	1. 台木や穂木の子葉は摘除する 2. 病葉や老化葉を優先的に摘除するが、子づる、孫づるの生長点を覆っている葉を株当たり2～3枚／回を目安に除去する	放任枝とネット沿いに発生した子づるはテープナーでしっかり止めるが、それ以外の枝は誘引せずきゅうり全体に光が当たるよう樹を立体的に仕上げる
中段	2 節摘心	1 節摘心ただし、草勢が弱い場合は早止めしない	2 親づるの摘心後、草勢維持のため放任枝を2～3本残す。作業しやすいように腰～肩の範囲に子づるを張らせる。中段の子づるは収穫後1節残して切り戻す	3. 膝から下は摘葉し、通風を良くする 4. 親づるの摘葉は親づるの摘心後1ヶ月間を目安に終了する	
下段	1 節摘心	1 節摘心	3 膝から下の子づる、孫づるは収穫後親節から切り戻す		

※下段：～10 節程度。中段：11～20 節程度。上段：21 節～

イ ピーマン

- ・ 整枝は、ふところ枝と徒長枝を間引きます。
- ・ 降雨が少なく土壌が乾燥している時はかん水チューブなどによるかん水や、通路かん水などを実施します。
- ・ 露地栽培でも点滴かん水装置によるかん水が行われるようになり、尻腐果（図 3）の被害軽減などに効果を上げています。
- ・ 尻腐果の混入低減対策については、令和 4 年度の試験研究成果を参考にしてください（ホームページアドレス <https://www.pref.iwate.jp/agri/nouken/seika/bunya/yasai.html>）。



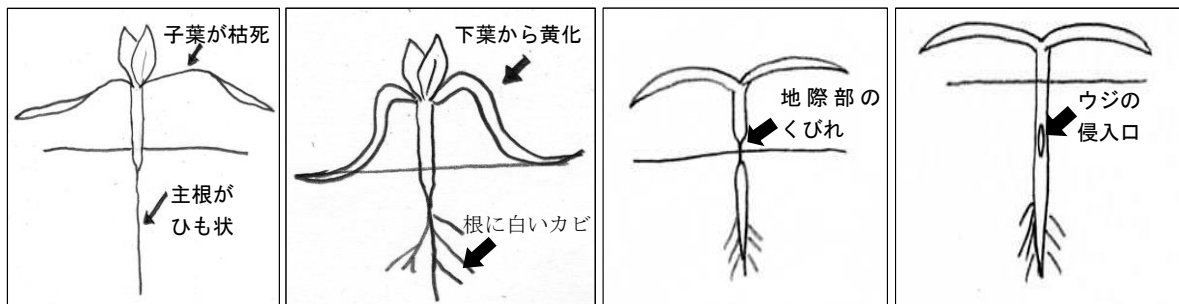
図 3 尻腐果（赤丸内のくぼみ症状）の例

- ・ 定植時に施用した殺虫剤の効果が切れる時期になるので、アブラムシ類やアザミウマ類の防除を行います。さらに、7 月下旬にはタバコガに注意します。

(4) 葉茎菜類の管理

ア 雨よけほうれんそう

- ・ 梅雨時期は、低温・日照不足から高温・多照へと急変することがあるので、換気や遮光をタイミングよく行い、萎れや徒長を防ぎます。
- ・ 低温・多湿でべと病が発生しやすいので、ハウスの換気に努めるとともに、株間を広くして風通しを良くし、被害株は随時抜き取ります。例年発病の多い圃場では、予防散布を徹底します。
- ・ 梅雨明け後は、各産地で選定している夏播き用の品種を利用し、生育中のかん水を積極的にを行います。かん水の目安は、土壌 10cm 深の pF 値が、水田で 2.3～2.5、畑で 2.4～2.7 の時です。
- ・ この時期に発生する生育初期の立枯症状の多くは、土壌病害や高温障害、タネバエが原因です(図4)。土壌病害の発生が多い圃場では、計画的に土壌消毒を実施して下さい。
- ・ 害虫では、アブラムシ類等の発生に注意し、粒剤等による予防防除や発生した場合は直ちに薬剤散布を行います。



根腐病の症状

萎凋病の症状

高温障害の症状

タネバエによる被害

図4 ほうれんそう生育初期の立枯症状の見分け方

イ キャベツ

コナガやタマナギンウワバ等の害虫の発生が増える時期を迎えています。定植時の薬剤の利用を徹底し、防除が遅れないように注意します。コナガは薬剤抵抗性が発達しやすいため、系統の異なる薬剤をローテーション散布し、1系統1作型1回の使用にとどめます。

収穫が終了した圃場は、害虫の発生源になるので、収穫後は早めに圃場を整理します。

結球期に降雨が続くと株腐病の発生が多くなります。結球開始期から株元にも十分薬液がかかるように薬剤散布を行い、圃場の排水対策も確認します。

ウ レタス

夏期高温時は降水量が多いとすそ枯病、軟腐病、腐敗病の発生が多くなり、特に、大雨により病害が多発する場合があります。降雨の前後に重点を置いた防除とし、排水の良い圃場への作付けや圃場の排水対策、前作残渣の圃場外持ち出し、地温上昇を抑制するマルチ利用(白黒ダブルマルチ等)を行います。

高温期の過剰施肥は、変形球や腐敗の発生を招きやすいので、品種に応じた施肥量にするとともに、適期に収穫して品質の向上に努めます。



図5 白黒ダブルマルチの利用

エ ねぎ

生育に応じた追肥、土寄せにより葉鞘の肥大伸長を促します。特に、早出しを狙う作型では、無理に土寄せを行って葉鞘が細くならないように注意します。また、大雨前後に土寄せを行うと軟腐病等の土壌病害の発生を助長しますので、作業のタイミングを計り、状況に応じて薬剤散布

を行います。

べと病が発生しやすい時期ですが、べと病等の病害発生圃場では秋にかけて葉枯病（黄色斑紋病斑）が発生する傾向にありますので、秋までの計画的な薬剤散布を実施します。

害虫では、ネギアザミウマの被害が多くなる時期ですので、随時防除を実施します。

次号は7月25日（木）発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。	
熱中症防止	■日中の気温の高い時間帯を外して作業を行うとともに、休憩をこまめにとり、作業時間を短くする等作業時間の工夫を行うこと。水分をこまめに摂取し、汗で失われた水分を十分に補給すること。気温が著しく高くなりやすいハウス等の施設内での作業中については、特に注意。 ■帽子の着用や、汗を発散しやすい服装をすること。作業場所には日よけを設ける等できるだけ日陰で作業するように努めること。 ■暑い環境で体調不良の症状がみられたら、すぐに作業を中断するとともに、涼しい環境へ避難し、水分や塩分を補給すること。意識がない場合や自力で水が飲めない場合、応急処置を行っても良くならない場合は、直ちに病院で手当を受けること。
農業普及技術課農業革新支援担当は、農業改良普及センターを通じて農業者に対する支援活動を展開しています。	

6月1日～8月31日は 農薬危害防止運動期間です	● 農薬散布時は、近隣住民・周辺環境に配慮しましょう ● 農薬散布準備、作業中・後の事故に注意しましょう ● 農薬は適切に保管・管理しましょう
-----------------------------	--